

小野寺 真人

# 土佐弘之著 『境界と暴力の政治学 ——安全保障国家の論理を超えて』

[Review]  
ONODERA, Masato  
Hiroyuki Tosa, *Political Science on the  
Boundary and Violence: Beyond the Logic  
of the Security Nation*  
(Received 30 September 2017)

A Noon of Liberal Arts, No. 8, 2018

はじめに

本書は国際関係論・政治社会学を専門にする土佐弘之による良作である。『アナキカル・ガザアナンス——批判的国際政治論の新展開』（御茶ノ水書房、二〇〇六年）という過去の作品のタイトルからお分かりいただけるように、土佐弘之の志向性は、国際関係論・政治社会学それ自体を批判的に捉えるところにあり、そこに主たる眼目があるといえよう。

それは、逆にいえば、そうした学問分野全体が臨床的かつ現実追認中心主義的になり、批判的思考を喪失していることの表れなのかもしれないが、評者の専門はあくまで日本近現代史・思想史なので、そうしたことにはこれ以上立ち入るべきではないし、立ち入らないこととする。

さて、書評論文であるにもかかわらず、次に評者の自己紹介をはじめめることに、親愛なる読者諸氏のご寛容を求める次第である。評者は先述したとおり、日本近現代史・思想史を専攻しているものが、デビュー作は「二つのダーウィニズム、二つのアジア観——明治一〇年代の言説空間のアボリアとエクソダス——」と題したもので、それは明治一〇年代に爆発的に流行した社会ダーウィニズムを二つのダーウィニズム（「強者必勝・弱者必敗」型と「弱者進化型」の「日本版」ダーウィニズム）に分割して定義し、それらのいずれもが脱亜論と興亜論とに円滑に接続し、帝国日本の膨張主義を言説から具体的な権力関係を構成するものとして、証明したものである。更  
に  
い  
え  
ば、そうした言説空間の総体は共同体空間としての日本を觀念から現実へと構成したというのが、拙論の眼目でもある。そして、そうした構成主義的権力から逸脱するために、植木枝盛の思想を社会ダーウィニズムによって可能性が証明される世界政府論、すなわ

ち、コスモポリタニズムとして積極的に意義づけるものであった。

そうしたことをご説明申し上げれば、評者が本書について論じることは、決して不当な出来事ではないことは、親愛なる読者諸氏には、ある程度ご理解いただけるであろうと硬く信じる。その上で、まず、本書の構成に沿って、本書について論じていくこととする。

## 一 本書の構成

本書は、以下のような部・章立てによって構成されている(節省略)。

序 動物化を昂進するグローバル内戦とそのメタ・ポリテイクス

### 第I部 政治的暴力の現代的位相

I ポスト世俗化時代における原理主義的アイデンティティ・

ポリテイクス

II Gゼロ時代のユーラシアにおける文明圏域の思想——動員さ

れるジオボデイ・ポリテイクス——

III クロノトポスの政治的変容——四千年文明国家と百年国恥地

図——

IV 方法としてのチベット

V 否認の政治と窪地からの声——マスキュリニティの危機との

関連で——

VI 現実を切り捨てる「現実主義」——マスキュリニティの再編

との連関——

第II部 「周辺化された現実」から「理想の力」へ

VII ジオボデイ・ポリテイクスの超克

VIII 「(非国・民)の思想」潜勢力——詩的想像力・再考——

IX 交差するラインを超えて——人権ギャップ縮小を志向する政

治——

X 「戦後かつ戦中」における脱セキュリタイゼーションの可能

性——国連安保理決議一三二五をめぐる問題から考える——

XI 脆い生をケアする論理——下からの平和な関係性の構築——

XII 方法としてのゾミア——リヴァイアサンを内破する野生のデ

モクラシー——

あとがきにかえて——過剰な安全保障国家化という問題について——

一覽していただいておりますの通り、本書は、著者の問題意識と文学的センスを感じる構成を取っており、表題も非常に適切であるということが分かる。書評論文としてはやや遅きに失しつつあることは否めないが、一般的には、二度読む価値のないものは一度読む価値もない。といわれるが、本書は何度でも再訪の価値のあるものである。そのことをより明瞭にするために、以下から本書の構成に従って、内容と達成点とを紹介してみたい。

## 一 内容と達成点について

まず序では、とりわけ911テロ事件以降の一連の世界的な戦争状態について、主権国家体制における非国家主体によるテロを「動

物化」(本書一頁。以下、本書のページ数を示す) / 「人狼化」(一〇頁) するガヴァナンスとして位置づけ、それを既存の批判的思想や具体的な諸実践とどう関係づけるかということに主要な力点が置かれることが宣言される。

Iでは宗教が完全に世俗化した時代として現代を定義し、特にフランスでのシャルリ・エルド事件に焦点を当てて、アメリカが主導権を握る「対テロ戦争」の現状に警鐘を鳴らす(二〇〜二二頁)。一方で、「原理主義のブローバック」という現象にも着目し、「再魔術化ないしは脱世俗化」する現代の現象についても注意を喚起している。すなわち、東南アジアからサハラ砂漠にかけての広いムスリム社会の現状について着目しているわけで、その意味において、本書はつねに、すでに世界的な視野を包含している。

IIは、「アメリカ単独覇権(ワシントン・コンセンサス全盛期)」を喪失した現代国際社会を「多極的な求心力を失った混沌とした」ものとして把握しつつ(三八頁)、サミュエル・ハンティントンの「文明の衝突」論を「本質主義論的な誤謬」としながらも、「過度に単純な図式ゆえに」、「パワー・ゲームを演出する際の小道具として有用になってきている」(三九頁)として、一定の評価を与えている。何かと自由主義的知識人たちの批判的になってきた「文明の衝突」論へのこうした評価は、賛否両論を呼ぶかもしれないが、評者は積極的に評価したい。更に、ウクライナ東部の「未承認国家」問題についても言及し(四五頁)、「移行パラダイムの終焉から静かな冷戦」が始まりつつあることに読者の注意を喚起する。

IIIでは、アメリカ大陸「発見」を鄭和がなしていたという二〇〇五年六月二日付けの『ニューヨーク・タイムズ』紙などの記事についてまず言及し(六〇頁)、現在、海洋覇権国家として勃興しつつある中国の領土問題について論じる(六六頁)。中国問題についても、三品秀憲や石井知章、梶谷懐などの少数の例外的論者を除けば、だいたい日本の自由主義的知識人たちは積極的な議論を控えていると評者は考える。それは、右派的な歴史修正主義へのカウンターやアゲインストでもあるだろうが、実質的には、中国への黙認を帰結してはいまいか。普遍主義的かつ人道主義的な観点から立論した著者の議論を、評者は果敢なる勇氣として高く評価したい。

IVは、タイトル通り、チベット問題が主題を構成している。III同様に中国の覇権主義の問題について言及しているのだが、興味深いのは竹内好が行った講演「方法としてのアジア」に触れつつ、中国を中心とする商業資本主義(市場ネットワーク)がポスト・フオーディズム時代に入って全面開化し、欧米の産業資本主義に取ってかわりつつある(八二頁)ことを予見した点である。それと同時に特筆すべきは、「抗議運動の盛衰と変容」(八六頁)に言及しながら、「国際社会」のあり方と問い直し(八九頁)、系譜学的思考に基づいてチベット論を展開した点にこそある。

Vでは、「否認の政治」というテーマについてが、中心的な論題となり、大江健三郎の『沖繩ノート』に触発されながら、旧日本帝國軍による強制自決問題についての歴史的なヴィジョンを提示する

(九六く九頁)。さらに、上野千鶴子らによる江藤淳・小島信夫論について言及し、「マスキュリティの危機」、すなわち、ジェンダー論に関する「バックラッシュの動きと言われる現象」を「宗教的原理主義」と「エスノナショナリズムナショナリズム」と並行勵起的に論じている(二〇一頁)。また、そうした危険な動向を韓国の濟州島「四・三事件」と重厚に絡めて論じている点は実に興味深いものがあり、著者の民衆史的かつ世界史的なヴィジョンの一端を垣間見せている(一〇六頁)。

VIは、「国際政治学における現実主義の標準的な思考様式をデリダ的に」、「単純化した」表現として「現実主義」と「理想主義」に分割して定義した上で(一一〇頁)、「日本的な現実主義」(一一二頁)を「拗れたフアルス回復運動」として強く批判している(一二五頁)。そして「不可視の〈現実〉を見つめなおしながら理想の力を取り戻す」ことが訴求される、語義矛盾ではあるが、極めて現実主義的な理想主義が高らかに謳われる(一二八頁)。これは著者からの、今日の日本の市民社会と、国家への警句と貴重な提言として受け取らねばならないだろう。

VIIからは、第II部「周辺化された現実」から「理想の力」へと題されて、第I部が比較的理論的かつ広域論的なヴィジョンに基づいた議論であったことに対して、具体的な運動実践を素材にした議論が展開される。「安全保障」を「平和について」「批判的に考える」ことが志向され(一三七頁)、「アジアにおける根強い国家中心主義」が批判的となる(一四三頁)。その上で、「ジオボディ」という概念・

述語が提起され、その「陥穽」の持つ「国民主義」的限界と「植民地主義」が指弾される(一四八く五三頁)。

VIIIでは、沖繩が主要なテーマとなり、川満信一と知念ウシらの文学・詩を具体的な素材として、「境界を越える想像力」が積極的に提起される(一五八く六七頁)。琉球孤に生きる海洋民の実践を「ハヤマト/ウチナンチュー」といった固定された枠に貫かれた国家の論理を乗り越えたことに「してはならないと警句する(一七二く三頁)」。これは、近年、伊波普猷・伊波月城・比嘉請観といった沖繩/琉球コスモポリタニズムの文学的系譜に関心を持つ評者にとっても、非常に有効な観点である。

IXは「主権国家の平和的共存だけではなく、人間一人一人が互いにトランスナショナルな相互依存関係を取り結ぶ中で平等な自由を実現できるような状況」を「国際的共生」と積極的に定義し、イヴァン・イリイチが提唱した「コンヴィヴィアリティ」を賞揚しつつ、それとの対極にある「グローバル・アパルトヘイト」体制になりつつある現代社会を糾弾してやまない(一八〇く一頁)。更には、「ラインの〈此方/彼方〉」として「自由と奴隷」、「文明と野蛮」の交差を描き、その陥穽について厳しく指摘する(一八四く七頁)。また、フランツ・ファノンやガヤトリ・C・スピヴァクらの思想にも触れ、「人権ギャップ縮減の政治」を志向したものととして評価する(一八八く九一頁)。いわゆる「第三世界」批評の可能性については、不勉強な評者はここから学ぶ事が多かったし、これを入りに、ホミ・K・バーバの『ナラティヴの権利…戸惑いの生へ向けて』(磯前順一、

ダニエル・ガリモア訳、みずず書房、二〇〇九年）を改めて熟読したいと考えた。

Xでは、「国連安保理決議一三二五をめぐる問題」に焦点が当てられ、国際関係論・政治社会学を専門とする筆者の本領が発揮される。それは、日本における「戦後」を国際関係における「戦中」として捕捉するものであり、「戦後日本を含む『平和圏』は世界各地で行われた戦争によって構成されていた」という事実を精確に指摘するものである（一九八頁）。そうした文脈コンテクストに於いて先述した「安保理決議一三二五」が考察の対象となり、ザアルター・ベンヤミンの「法定的暴力」の暴力論を参照しつつ、「始原としての恐怖の政治の暴力」がカール・シュミットのな意味での「政治的なもの」と連関して論じられ、「セキユリタイゼーションと集団的アイデンティティ」の問題を帰結する構成になっている（二一〜七頁）。そこで、さらにジュデイス・パトラの「憎悪表現」についての議論を援用して、「平和圏」の外に排除されてしまっている人々の声を反映していくような運動の持続的モメントモメントの必要性が訴求される（二二三頁）、これについても評者は、全面的に賛同したい。

XIは、「グローバル・ジャステイス論」に照準を定めて、マイケル・ウォルツァーのコスモポリタニズム論とユステティアニスの正義論を引用しながら、「非理想的理論（正義論）を脱・再構築する道筋」が模索される（二二六〜九頁）。そのためにジーン・ベスキー・エルシュテインの正義論を「主体化の暴力」として批判的に再検討し（二二九頁）、「脆さの否定から脆さへの配慮」が志向される（二三四

〜五頁）。こうした観点は、評者自身がコスモポリタニズムに問題関心を持っていることからいっても、率直にいて驚嘆すべきものがあつたといつて良い。

XIIでは、「ゾミア」という概念・述語が提起され、現在における「制度的デモクラシーの機能不全」が強く指摘される。それは「代表制の問題」（二五二頁）や「デモクラシー」そのものの問題に分割されつつ（二五七頁）、古代ギリシア哲学におけるイソノミアが召喚される（二六〇頁）。古代ギリシア哲学、とりわけイソノミアについては、柄谷行人が近年論じているが、本書の白眉は「方法としてのゾミア」として「平等な自由」を希求する「野生のデモクラシー」は、終着地点というテロスがない永久革命のようなものであり、「ある種の『方法』としか言いようがない」としながらも（二六四頁）、それを「デモクラシーの深化を遂行していく役割を果たす」、「新しいアナキズムまたはポスト・アナキズム」（二六六頁）として積極的に評価する部分にあることに間違いない。

最後の、あとがきにかえてでは、過剰な安全保障国家化は「デモクラシーを空洞化しながら、我々の人権そのものを蹂躪する方向に動いている」として、警鐘を鳴らしている（二七二頁）。これは、近年、アマルティア・センらによって提起されている「人間の安全保障」★概念へと接続可能な議論であり、非常に有効な観点であるといえるだろう。

結語——あるいは、今後の（われわれの）課題について

さて、書評論文として評者に与えられた紙幅もいよいよ尽き果てようとしている。そこで、本書に対する若干の稚拙な私見を述べて、結語としたい。

本書がしばしば言及する哲学者としてジャック・デリダの固有名が挙げられるが、果たして著者はデリダ哲学をどのように捉えているのだろうか。著名な「脱構築」理論は、ポール・ド・マンやガヤトリ・C・スピヴァクなどのフォロワーを産出し、二〇世紀文芸批評の主流をなしたとあって良い。その眼目は次の通りだ。言語に外部はなく、言語はあくまで事物の表象であるに過ぎない。

よって、対話の基本は「誤解」にあるとされ、デリダは断定的な「である」に「である」と抹消線を付加することで実践的な理論を提示する。これは、音声中心主義によって構成されるヨーロッパ的な理性中心主義と自民族中心主義を厳しく指弾する重要な指摘ではあっただろう。しかし、他方においては、未開な民族共同体にとっては、無文字社会が基本型であるところは少なくとも、デリダ哲学は、そうした民族共同体にとっての言語状況を無視した理論であるといわざるを得ない。そうした観点からすれば、デリダ理論は、結果的には、ヨーロッパ中心主義的な自民族中心主義を再生産した理論であったといえよう。東洋的な表意文字もデリダ哲学の射程距離外に位置していることは明白だからである。このことを突き詰めて

いえば、次のようなことを容認する。すなわち、ヨーロッパ中心主義的な文明覇権と、デリダ理論の思想実践との挾撃によって未開な民族共同体の音声言語実践を破壊する、極めて危険なものであることを。フェルディナント・ド・ソシュールの言語学になぞらえていえば、言語＝言葉＋話言葉の系譜から、デリダ哲学は非常にナイーヴな立ち位置を占めるといわざるを得ないのである。更に蛮勇を奮って、端的にいえば、デリダ哲学の核心部分は、それ自体が同語反復論的でもある。そうした性格を持つデリダ哲学を無批判に引用することは、著者自身を損なう危険性を孕んでいるといわざるを得ない。

逆にいえば、そうしたデンジャラスな点にこそ、デリダ哲学の可能性があるということも出来るかもしれないのだが、むしろ、ミシェル・フーコーの言説／生一政治／生一権力論や、ドゥルーズの構造主義論、あるいはジル・ドゥルーズⅡフェリックス・ガタリの「戦争機械」や「捕獲装置」概念といった実践性の極めて高いものから、著者独自の政治・社会理論を構築すべきではないだろうか、と評者は提起したい。もともと日本の学術界では、特に、ドゥルーズⅡガタリ哲学は実践哲学として見做されていない観は否めないが、逆説的にいえば、そこにこそ論理的な勝機があるともいえよう。

さて、評者の力能的貧弱を顧みず、本書に対して、ある意味では暴力的に論及してきたが、それは評者の責任に他ならない。その点にご海容を願うと同時に、本書の価値を損なうものではない事を明言しておきたい。本書は理論的にも実践的にも極めて高いレヴェル

で構成されており、耳慣れない概念や述語も一読してすぐ理解できるだけの構成力を持っている。アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『マルチチュート 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』<sup>★9</sup>は、ある種のマルクス主義的な経済決定論であり、世界的な共有文化的側面から新たな群衆による革命を予見しようとしたものだったが、本書は、そうではなく、極めて理論的かつ実践的でありながらも、徹底的にリアリズムを見据えている。そこにこそ、本書の真の価値は所在しているのである。

欧米学術書・論文なども、参考文献として多数挙げており、この分野について関心をもった読者にとって、よいガイドブックになるという性格をも持ち合わせている。本書評論文をこ味読いただいた親愛なる読者諸氏には、是非お手にとつて熟読していただきたいと考える次第である。

★1 『洛北史学』第九号、二〇〇七年。

★2 代表作に「近現代中国の国家・社会関係と民意——毛沢東期を中心に——」渡辺信一郎・西村成雄編『中国の国家体制をどうみるか——伝統と近代——』汲古書院、二〇一六年がある。

★3 代表作に『現代中国のリベラリズム思潮「一九二〇年代から二〇一五年まで」』藤原書店、二〇一五年、『中国リベラリズムの政治空間（アジア遊学 一九三）』勉誠出版、二〇一五年がある。

★4 代表作に『日本と中国、「脱近代」の誘惑…アジア的なものを再

考する』太田出版、二〇一五年がある。

★5 『哲学の起源』、岩波書店、二〇一二年。

★6 この概念については、近年研究が膨大に蓄積しつつあり、問題含みの作品も少なからず散見される。そこで、代表作として、アマルティア・セン、東郷えりか訳『人間の安全保障』集英社、二〇〇六年を挙げておく。

★7 小泉義之訳『何を構造主義として認めるか』、稲村真実・小泉義之・笹田恭史・杉村昌昭・鈴木創士・立川健二・松葉祥一・三脇康生訳、監修『無人島 1969-1974』河出書房新社、二〇〇三年。

★8 「二二七年——遊牧論あるいは戦争機械」と「BC七〇〇年——捕獲装置」、いずれも宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・十宮林寛・守中高明訳『千のプラトール 下 資本主義と分裂症』河出書房新社、二〇一〇年。

★9 上下巻とも幾島幸子訳、水島一憲・市田良彦監修、日本放送出版協会、二〇〇五年。

おのぞら・まさと（京都府立大学学術研究員）

